

## スーパービクセン・トラブル・ツアー 2

- 1 -

——いったい、いくつ潰したんだろ。

ライトバンを運転しながら、指折り数えて考えた。東京を出るとき二つ、茨城で四つ、福島で六つ、ここで十一だから……二十三個か。

三日で二十三個。我ながら記録的なハイペースだと優美はひとり微笑んだ。

生まれて初めて男の玉を潰したのは十二歳のときだ。すでに大人なみに発達した優美のみごとな乳房に男たちは好色な眼を向けた。近所の高校生三人にいきなり暗がりに入れ込まれ、レイプされかけた。優美は必死に抵抗し、何かの拍子にばたばたさせた脚の先が一人の股間に命中した。突然、行為を中断して悶絶する高校生の姿に、優美は悟った。呆気にとられたもう一人に襲いかかり、睾丸を蹴りつけた。一人は逃げた。優美は泣いて謝る二人の高校生の睾丸を潰した。その場は逃げた一人も、優美から完全に逃れることは出来なかった。優美は彼の高校に潜入し、一人になったところを襲撃し、握り潰した。

回想に耽っているうちに日が暮れてきた。

——おなかすいたな……。

人間とは不自由なものだ。睾丸を九個も潰して昼飯にありついたというのに、もう消化してしまっている。

- 2 -

優美の不思議さは、さきほど男五人を不能に陥れておきながら、レジから金を盗まなかったことだ。彼女は、必要性を感じれば躊躇なく玉潰しを実行する。必要以上のこと——たとえば強盗は手をつけない。計画性の無さが彼女の信条といえれば信条ではあった。ともかく、いま直面している空腹感をなんとかしなければならぬ。スナック菓子でも入っていないかとダッシュボードを探してみたが、食べ物が入っていないかった。

——仕方ない、同じ手でいくか。

道路脇にちらほらと民家やドライブ・イン、コンビニエンス・ストアなどが並びはじめた。町が近い。人が集まるところならば、チャンスがあるだろう。

「たすけて！」

コイン駐車場にバンを停めて降りると、いきなり正面から人とぶつかった。優美は、ぶつかった人間と抱き合うかたちで尻餅をついた。

黒い髪がばさりと優美の顔をおおった。慌てて顔を離すと、眠たげな顔をした少女だった。優美より少し背が高い。デニムのキャミソールに白いミニスカート、ブーツという出で立ち。

「もう逃げられねえぞ」

少女は後ろを振り向いて、悲鳴をあげた。少女の背後に、二人の男が立っていた。白いスーツ

に黒いシャツのヤクザらしい風体の男、そして髪の毛を金色に染めたヤンキーのような手下。

「話が違うじゃないの！ あんなところで働くなんて聞いてないよう」

少女は叫んだ。

「騙されたおめえが間抜けなんだよ」

ヤクザ二人はげらげら笑った。

「さ、おとなしく来い。いま帰ってくれば痛い思いはせずにすむからよ」

少女は必死で優美にしがみついた。

「困るなあ。そんなに駄々こねるんだったら、こっちだっていやな事をしなきゃならないんだぜ」

白いスーツのヤクザが、懐からドスを取り出し、もてあそんだ。

「ちよつと……」

優美が声を出した。ヤクザ二人はいま気がついたかのように優美に視線を向けた。優美は少女に言った。

「重いんだけど、どいてくれない」

少女は何か言おうとしたが、優美はかまわず彼女を振り払って立ち上がった。優美は地面にしゃがみこんだ少女に向かって言った。

「ね、あんた二千元ほど持ってない？」

「え？」

少女はきよとんとした顔をした。

「持っていないか……」

優美は小さく呟き、今度はヤクザたちに向かって言った。

「あんたらは持っていない？」

「なんだ、てめえ」

手下の金髪が怒鳴った。

「あっちへ行つてろ！」

「二千円くらい、貸してくれたっていいじゃん。けち」

「てめえ！」

金髪は左手で優美の肩を乱暴につかみ、右手を振り上げ、そこで硬直した。

優美の膝が、金髪の股間に食い込んでいた。

金髪は目を見開き、いまにも嘔吐しそうな顔つきだった。優美はつづけて二度、股間を膝で蹴りあげた。よほど当たり所がよかつたらしく、一撃で睾丸は二つ潰れていた。二度目の蹴りで陰囊が破裂した。

金髪は骨が溶けたようにぐんにやりと地面にくずおれた。白いスーツのヤクザは、何が起こったのか一瞬理解できなかった。ぼんやりと優美を見つめていた。

「あんたはどう？ 貸してくれる？ 私、おなかすいてるんだ」

「ざけんな！」

ヤクザは顔を真っ赤にして、チンピラに駆け寄り、ゆずぶった。

「おい、ケンジ、どうした？」

「玉、潰れちゃったんだよ」

事もなげに言う優美を、ヤクザは今度は真っ青になって見上げた。

「貸してくれないと、あんたの玉も潰すよ」

ヤクザは唾を呑み込み、どう行動をとるべきか考えた。二千円渡してこの場は立ち去ってもらうのが一番いいが、自分を痛めつけられて黙って見過ごすのは沽券にかかわる。だが、顔色一つ変えず男の睾丸を蹴り潰した女だ。簡単に追い払えるとは思えない。

だがヤクザは決心した。武器を持っている様子はない。こっちにはドスがある。

ヤクザは立ち上がった。

「自分におかしな真似をしてくれたな」

ドスを抜いた。

「てめえの顔をズタズタにしてやる」

「貸してくれないんだ」

優美は失望したように言った。今日、十五個めの玉潰しをすることになりそうだ。一日十五個。これまでの最高記録は十二個。六人の不良少年グループを一人で壊滅させたときにつくったレコ

ードを塗り替えることになる。

ヤクザはドスをひらめかせ、襲いかかってきた。優美は片脚をはねあげた。ブーツの爪先に手を蹴られ、ヤクザのドスが空中に舞った。優美はつんのめったヤクザの背中を蹴った。ヤクザは地面に手をついた。優美は背後から、股間を蹴った。

「ぐっ！」

ヤクザが呻いた。優美はヤクザの左右の足首をつかんで持ち上げ、股を大きく広げた。股間に踵を打ち込んだ。二度三度、蹴りつけた。ヤクザの睾丸が二つとも潰れ、ヤクザは血反吐をはいて失神した。

細かく痙攣するヤクザの懐に手を差し込み、札入れを抜き取った。なかを改めると、一万円札が十枚ほど入っていた。千円札はない。優美は一枚抜き取り、

「八千円、借りね。今度会ったとき返すから」

と声をかけ、すたすたと駐車場を出ようとした。

「待って！」

振り向くと、背後に少女が立っていた。

「なに？」

「ね、お願い、連れて行って」

「連れていけて……」

「あんたみたいな強い人と一緒なら安心だし、それに……ただとは言わないよ」

「だって、あんた、二千元も持ってないんだろ？」

「今はね。でも、すっごい儲け話があるんだ」

「儲け話？」

優美は疑わしげに少女を見た。年の頃は優美と変わらない。ぽっちゃりとした可愛らしい顔だが、キヤミソールの下で大きな胸が息づいていた。儲け話とやらを持っている風情ではない。

「とりあえずさ、仲間のとこに連れていくから……。ね。お願い。一生のお願い」

少女は手を合わせた。優美はしばらく考えていたが、やがてぼそりと言った。

「乗りな」

少女は若菜といった。十八歳。優美よりも二つ年上だった。

パンの助手席で、若菜は身の上話を喋った。北関東の地方都市に育った若菜は、十七の時に一つ年下の友人と家を飛び出した。原因は家庭環境だが、あまり詳しくは触れなかった。東京に出てきたものの職がない。途方に暮れているうちに、ヤクザにつかまって売春をさせられそうになった。若菜は、友人とともに夢中で逃げだし、この町まで落ち延びた。だが、ヤクザたちは執念深く追いかけてきた。危うく捕まりそうになったところを、優美に助けられた、というのである。

「別々に逃げてさ、ここからちょっといったところに大鳥山って山があつてね、その麓に運動公

園があるから、そこで落ち合うことにしてるの。ほんと、よかったよう」

「事情は分かっただけだし、儲け話って何？」

「それなんだな、実は」

若菜はもったいぶって言った。

「お宝が眠ってるんだよ。その大鳥山に」

「お宝？」

「そう。時価十数億だつてさ」

町外れの運動公園はすでに門が閉まっていた。

若菜と優美は、塀を乗り越えて中に入った。テニスコートやサッカーのグラウンドとともに、児童公園が設置されていた。木で作ったログハウス風の小さな建物に、人影がうずくまっていた。

「亜紀？」

若菜が声をかけると、人影はむっくりと顔をあげ、わっと泣き出し、若菜にとびついた。

「何やってたんだよお」

亜紀という少女は、泣きながら責めたてた。小柄で人懐こそうな眼をしていた。胸の大きく開いた花柄のワンピースに白いサンダル。

「お腹すくしさあ、寒いしさあ、暗くなるしさあ、鍵は閉められちゃうしさあ、怖かったよお」

「ごめんごめん。東京から追っかけてきたヤクザに捕まりそうになつてさ」

「えー！」

「大丈夫。そこをこの人に助けられたの」

若菜は優美を指さした。亜紀はまじまじと優美を見つめ、それから言った。

「そうだったんですかあ？ 有り難うございました」

「あつという間に二人ともやつつけちゃったんだよ。凄いでしょ」

亜紀と若菜は、憧れに満ちた眼差しを優美に向けた。優美は当惑気味に顔を背け、

「そんじゃ、私は」

と踵を返した。若菜が慌てて飛びついた。

「ちよ、ちよつと待ってよ。もう行っちゃうの？」

「ここまで運んできてやったんだ。もう用はないだろ」

「だって、だって、お宝は……」

「そんなもん興味ないよ」

優美はニベもなく言った。

「だって十数億だよ、十数億」

「どこにあるんだよ、そんなもん！」

優美は怒鳴った。二人はびくりとしたように立ちすくんだ。

「こんなでかい山のどこかにお宝？ 見つかるわけないじゃんか。そんなもんアテにして、しんどい思いをするなんて冗談じゃないよ。探すんだったら、あんたら二人で探しな」

優美は言い放つと、すたすた歩き出した。と、優美の背後で号泣が響いた。振り向くと、亜紀が地面にしゃがんで顔を覆っていた。優美はさすがに気が引けて立ち止まった。

「……もう駄目だよ……。お金もないし……。歩けないし……。死んだほうがまだだよ……」

亜紀は泣きながらわめいた。優美は訊ねた。

「あんたも、お金ないの？」

若菜と亜紀は同時に頷いた。

「しよーがねえなあ」

優美は頭を掻いた。

二人をバンに載せ、近くのファミリーストランに車を停めた。

さつきヤクザから奪った一万円があった。食事を頼むと、亜紀と若菜は貪るように食べた。

亜紀はなかなか愛嬌があり、ワンピースの胸元に豊かな乳房が深い谷間をくつきりと作っていた。三人揃った巨乳娘たちを、他の客席の男たちがちらちらと視線を投げかけていた。

「お宝たつて、噂だろ、そんなの。テレビでやってるじゃん。徳川の埋蔵金を何十年もかかって掘ってる馬鹿がいるって。見つかった試しなんかないんだから」

「一緒にしないでよ」

亜紀が口のなかに pasta を詰め込んだまま言った。

「確実な話なんだから」

「どう確実なんだよ」

「だつてさ。徳川の埋蔵金って何千年も昔の話でしょ」

「何千年ってことはないよ。せいぜい百数十年だよ」

「似たようなもんじゃん。私らが言ってるのはさ、五十年前の話なんだから」

終戦直後、とある旧華族の屋敷に泥棒が押し入り、高価な宝石類を盗んで逃げた。犯人は、大鳥山に逃げ込んだが、警察に包囲された挙げ句、崖から転落して死んだ。盗んだ宝石は見つからなかった。さまざまな証拠からして、大鳥山に逃げ込むまでは所持していたという目撃証言があるから、山の中に埋めたに違いないと言われた。事件後、何人かのトレジャーハンターが宝石探しに挑戦したが、いまだに見つかっていない。

「ほうら、ごらんよ」

優美は言った。

「結局、探したけど見つからなかったんだろ。警察だってトレジャーハンターだってプロだぜ。あんたらみたいな素人に見つけられるはずがないじゃないか」

「そんなことないよう」

亜紀が口を尖らせ、足元の靴を「そこそこ」探った。

「なんだよ、それ」

優美は、亜紀が取り出した銀色の掃除機のような形をした機械を呆れたように見ながら言った。

「金属探知機」

「え？」

「これで地面を探つてね、小判とか金属が地下にあると、ピピッと反応するんだぜ」

「お前な……」

優美は、誇らしげなポーズをとる亜紀にため息をついた。

「宝石って……金属じゃないんだぜ」

「え？」

亜紀と若菜がきよんとした顔をした。

「宝石つてのは金属じゃないの。だから金属探知機なんかじゃ反応しないの」

二人は落胆したように、重そうな金属探知機を見つめた。

「なあんだ……」

「せっかく大変な思いで手に入れて、ここまで運んできたのに……」

「どこで手に入れたんだか知らないけど……そんなもの邪魔なだけだから、捨てちまいな」

しょんぼりと肩を落とした二人を横目に見ながら、優美は席を立ててトイレに向かった。

「動くな」

洗面台に立った優美の首筋にひんやりとした金属が押し当てられた。優美はため息をついて両手をあげた。

「なによ」

背後に立った男は息が荒かった。臭い息がさかんに優美の襟首にかかった。鳥肌が立った。

「おめえら……なんで、あのお宝のこと知ってるんだ？」

「お宝？」

「さつき、さかんに喋ってたじゃねえか。大鳥山に埋めた宝石のことだよ」

「あの二人に聞けば？」

優美はうんざりして答えた。

「私はさつき聞いたばかりなんだ。なにも知らないんだよ」

「……………」

男は無言だったが、あきらかに動揺していた。首筋にあてられたナイフが細かく震えているのが、空気の振動で感じられた。

素人だ、こいつ。

だとしたら、様子を見るまでもないだろう。

「ぐっ」

男が呻いた。優美が踵を後ろにはね上げたのだ。踵はまともに男の睾丸を蹴りあげた。

優美はすかさず踵を返し、体を前屈みにした男の両耳に手刀を浴びせた。男が両手で耳を抑えた。優美は、がら空きになった股間を膝で蹴りあげた。

男はへなへなと床にくずおれた。年の頃は五十すぎだろうか。頭のはげ上がった、貧相な小男だった。

優美はトイレを出て、テーブルに戻った。

「大鳥山のお宝を狙ってるのは、あんたたちだけじゃなさそうね」

亜紀と若菜が顔をあげた。

「事情を知ってそうなおっさんが、トイレで寝てるよ。訊いてみたら？」

二人は立ち上がり、走り出した。優美は亜紀と若菜がトイレに入ってゆくのを確認すると、立ち上がり、伝票を手にしてレジに向かった。

駐車場でバンに乗り込み、エンジンをかけた。

時価なん十億の宝石だか知らないが、そんなものを持つていけば、負担になるだけだ。お金など欲しくなったら、いくらでも手に入れる方法はある。厄介な荷物を背負って不自由な生き方だけはしたくない。

優美はしばらく車を走らせていたが、ふと、道端で大きく手を振っている、ハイキング姿の男に気づいた。優美は車を止め、運転席側の窓を開けた。

「すいません。大鳥山の運動公園まで乗せていって貰えませんか」

「どうしたの？」

「実は、大事なものを盗まれたんです」

「盗まれた？」

「ええ。お願いします。犯人は、運動公園に行くって言ってました。お願いします。このとおりです」  
優美は男を見つめた。眼鏡をかけ、痩せた、おとしなそうな男だった。三十過ぎらしい。まあ、こいつなら危ないこともないだろう。優美は助手席のドアを開けた。男は入ってくるなり、「お願いします。すぐにいってください」と、珍しく優美のGカップ巨乳に目も止めず、息を切らしている。優美はエンジンをかけ、Uターンした。

「野郎、白状しろ！」

優美が、再び運動公園に着くと、児童公園のジャングルジムに縛りつけられた男を、二人の少女が責めたてていた。

縛られているのは、さつきトイレで優美にナイフを突きつけた小男だった。責めているのは、亜紀と若菜だった。

「えい！」

亜紀が、縛られた男の股間を膝で蹴りあげた。男は悲鳴をあげ、ひいひい泣きわめいた。

「すごいねえ。こんなに効果あるなんて知らなかったよ」

亜紀が興奮したように言った。

「でしょ。さっき優美さんさ、二人の男を股間蹴りでやつつけちゃったんだから。男を責めるには、これがいちばんみたいなんだよね」

若菜が、今度は私ができる、と言いつつ、男の股間を蹴りあげた。男はもう何度も蹴られたのだろう。ぐったりと頭を落として痙攣するばかりだった。悲鳴をあげる気力すら残っていなかった。

「あー！」

眼鏡の青年が大声をあげた。亜紀と若菜がこちらを振り返り、ぎよつとして立ちすくんだ。

「き、君！ 返せ！」

青年がわめき、亜紀の胸ぐらをつかんだ。

「な、なにすんだよお」

亜紀がわめいた。

「僕の探知機返せ！」

「な、なんのことだか……」

「とぼけるな！ あ、あれは命より大事なものだ。返せ！」

「し、しらないよお」

「これ？」

優美の声がした。優美が、重い金属探知機を軽々と持ち上げてみせていた。

「あー、これだ！」

青年は金属探知機に飛びつき、いとおしそうに頬を擦り寄せた。亜紀と若菜は、バツが悪そうな顔で、優美を上目遣いに見ている。

「どーでもいいけどさあ」

優美は、ジャングルジムに縛りつけられたまま、ぐったりとなった小男を見ながら、亜紀たちに言った。

「もうちよつとで、こいつ死ぬとこだよ」

「え？」

優美は、小男の股間をまさぐった。小男は完全に意識を失っているらしく、びくりと痙攣しただけだった。

「二つとも潰れてる……。これ以上蹴ったら、袋が破裂して、出血多量で死ぬよ」